

On "Sermons and Life"  
of Zenkoku Kogai

Michiya KURODA

*Department of General Education  
Okayama University of Science  
Ridai-cho 1-1, Okayama, 700 Japan*

(Received September 27, 1984)

Zenkoku Kogai, a Zen priest in the middle age of the Edo period, was called a devil Zenkoku. But I read between the lines of his Sermons, then I could understand that he was a man of natural religion which was the thought of the earliest Chinese Zen. In spring, autumn, and winter, there are many harmonies between man and nature. Every harmony was the Buddha.

## 後記

- (1) 高外和尚遺語が侍者一行等編となっているが、一行とは寿徳寺（多摩市桜ヶ丘）八世西念一行のこと、梅岩寺（東村山久米川町）で明和元年（一七六四）一月八日に示寂している。
- (2) 大店簗雪は下関市赤間関の人。松本市の全久院二三世、兵庫県の永澤寺独住十一世の時に名古屋市の古刹神蔵寺を再興した。
- (3) 高外全国和尚の伝記は「医王開山高外和尚行状」にくわしいが、大店はこの「行状」を千丈実岩に見せて「參州医王開山老和尚塔銘并序」を書かせて「本書」の中に含ませているが、実岩の文は本書とは別に「統曹洞宗全書」の中に出ているので、新発見とは言えないから、こゝでは除外した。
- (4) 医王寺藏の鈴木家譜では三河鈴木氏の祖は、三郎重家の叔父鈴木重善（一一二〇―一二〇〇）であり、善阿弥は重善である。  
大店が全国行状の中で觸れている鈴木正三について、三河鈴木家九代としているのは誤りであることを昭和五八年二月五日発行の「岡山理科大学通信第四八号」の「高外全国研究餘録」で明かにしたので、こゝでは述べないが、正しくは十五代目に当る。然し出家したので家を相続しなかった。

觀髓上座來東関武陽大泉寺呈偈曰剎那滅却是非意透出須彌百億天東海補陀又甚有大象徹底一輪圓山僧云作麼生是圓照處座云徧界曾不藏僧云不藏底作麼生座云步步踏著銀翠青山僧云好箇消息座便禮拜今言作四已耳暮春謁富山因馬偈曰暮跳躑躅却乾坤皎潔靈泉徹深源這箇赤心密保護法幡他日巨反翻

補陀山

高外全國

年三

高外全國が得峰觀髓に与えた伝法文書

(玉島円通寺所藏)

觀髓上座來東関武陽大泉寺。呈偈曰。剎那滅却是非意。透出須彌百億天。東海補陀又甚有。大泉徹底一輪圓。山僧揆云。作麼生是圓照處。座云。徧界曾不藏。山僧云。不藏底作麼生。座云。步步踏著綠水青山。山僧云。好箇消息。座便禮拜。今言作四已。暮春謁富山。因馬偈曰。暮跳躑躅却乾坤。皎潔靈泉徹深源。這箇赤心密保護。法幡他日巨反翻。

補陀山

高外全國

附與

觀髓上座

釋氏  
高外  
全國  
之印

得峰觀髓は越後の人、佐藤氏。享保四年（一七一九）三月大泉寺にて嗣法。宝曆三年（一七五三）十月、大和国碓村（奈良県吉野郡川上村井光）觀音寺より、大泉寺二四世に転住。後に、大忍国仙に席を譲り、全國開山の医王寺（豊田市矢並町）三世となる。明和六年（一七六九）示寂。全國伝法文書の「享保四」は「享保四」が正しい。この文書が円通寺にあることについては、恐らく大忍国仙が「かたみわけ」として貰っていたものであるうか。全國は觀髓との問答を東上八世石頭希遷の『參同契』の「靈源明皎潔。枝派暗流注」の趣意により締め括っている。

## 大店盤雪の「題」

先師遊鷺嶺。春臨西來室。三坐名場。應機接物。

殺活龍象。度統草迷。

可謂為大医王。能療

象病者也。一句半偈不墮。

今時善讀者請寫。

著眼句分明宗。雪也辱

汲恩海。一滴乃至一滴。收

全潮矣。取平生語錄

及與行業編作一卷。以

藏本山。庶幾百千年下

先師門風彌悠臺也

安永五丙申年

爰冬吉旦

前永澤龍華開始

不肖雪大店叩頭拜題

先師存遺教  
聖賢志氣  
出三望必坊  
度釋梅物  
教誨教象  
度執厚迷  
可謂為大  
當王無療  
症病夫  
一為年  
倡不

陳公時  
若海  
若諸  
若  
及思  
海一  
清乃  
右一  
滴收  
全潮  
矣取  
平生  
診錄  
及以  
以業  
編化  
一  
卷以

莊在止庵  
筆百千年  
先師  
風流  
悠長  
也  
安  
五  
丙  
申  
年  
一  
書  
人  
吉  
上

家  
永  
淳  
雅  
集  
一  
卷  
不  
肖  
曾  
大  
店  
叩  
以  
拜  
題  
入

暑明秋還故山。八月下旬示微疾。筆然臨機呵責。參隨無有柔弱顏色。故不強要醫藥。九月中旬告近侍曰。吾已行脚時至。以睡岩窟。可作塔處。十七日夜示諸徒曰。老僧去後。吾門人等專奉重大法。莫錯昧正眼。一衆周章到十八日午後。頻請責偈。師曰。吾平生癡鈍。今何堪作偈。叱之不休。終深筆曰。七十二歲善來惡來。後端的不去。不來。咄。脫然坐化。實寬保二成。九月十八日未刻。見聞莫不悲嘆。法臘六十二歲。世壽如偈。門人依法座塔于本山東丘。得其法者二十六員。參徒歸戒者若干。蓋師敬愛衆僧。心抱謙卑。到性衲子機鋒。惡辭活臨時。故也。唱鬼和尚矣。某甲久服勤。左右詳師行由。故狀大槩用爲後鑑。云爾。

龍華小師大店焼香九拜撰

明秋故山に還る。八月下旬微疾を示す。然りと雖ども。機に臨て參隨を呵責するに柔弱の顔色有ること無し。故に強て医薬を要せず。九月中旬。近侍に告て曰く。吾れ已に行脚の時至る。睡岩窟を以て塔處と作すべし。十七日の夜。諸徒に示して曰く。老僧去て後。吾が門人等専ら大法を奉重して錯て正眼を昧すること莫れ。一衆周章。十八日午後に到て頻に遺偈を請ふ。師曰く。吾れ平生癡鈍。今ま何ぞ偈を作すに堪ん。之を叱ども休ず。終に筆を染て曰く。

七十二歲善來惡來

末後端的不去不來 咄

毫を擲て脱然として坐化す。實に寬保二成の九月十八日未の刻なり。見聞悲嘆せずと云ふことなし。法臘六十二歲。世壽偈の如し。門人法に依て。塔を本山の東丘に瘞す。其の法を得る者二十六員。參徒歸戒者若干。蓋し師衆僧を敬愛し心に謙卑を抱く。衲子を挫に到ては機鋒惡棘殺活時に臨む。故に世に鬼和尚と唱ふ。某甲久く左右に服勤し師の行由を詳にす。故に大概を狀て。用て後鑑と爲す云爾。

龍華小師大店焼香九拜撰

遊之地阿弥即鈴木三郎重家二男歟續到乎此晦迹爲沙彌築第居之爾後物換星移堂宇都廢人煙寂々幾百年矣時鈴木九代孫稱鈴木正山者是跡再開新安大悲以爲本尊建寺復旧於是山盤挽回舊時春色而後或廢或興榮衰交至而今地主等延師而居焉以爲開山祖此山也後則山岳嵒嶭長松聳空前則巖谷幽邃澗水潺湲寂寞無人所隱者退藏之處也

師喜以爲終焉之地如是之類蓋是護法所推乎初未嘗計而所得者也元文四年己未冬結制頒修西來高祖三十三回忌四來雲衆及八百指入座下徒開師古稀初度壽域賑濟衆僧上堂語話電飛雷走爲四衆開戒受者一千餘指五緣完備三冬解矣師構小亭於東嶺自名睡岩窟終日安坐專効大梅之風東江御園邑民創長福小刹請師寬保元年秋到彼地過寒

阿弥は即ち鈴木三郎重家の二男。敗績して此に到り迹を晦て沙彌となる。第を築て之に居す。爾の後。物換り星移て堂宇都て廢し。人煙寂々たること幾百年。時に鈴木九代の孫鈴木正三と稱する者跡を追。再び開き。大悲を安じて以て本尊と爲し。寺を建て旧に復す。是に於て山谿旧時の春色を挽回す。而して后に或は廢し或は興り。榮衰交々至る。今の地主等師を延て居らしむ。以て開山祖と爲す。此の山や。後は則山岳嵒嶭長松空に聳へ。前は則巖谷幽邃澗水潺湲。寂寞として人無き所。隱者退藏の處なり。

師喜で以て終焉の地と爲す。是の如の類蓋し是れ護法の推す所か。初より未だ曾て計らずして得る所の者なり。

元文四年己未の冬結制。預め西來高祖三十三回忌を修す。四來の雲衆八百指に及ぶ。また座下の徒。師古稀初度の壽域を開き。衆僧を賑濟す。上堂語話。電飛び雷走る。四衆の爲に開戒受者一千餘指。五緣完備し三冬解せり。師小亭を東嶺に構へ。自ら睡岩窟と名け。終日安坐。専ら大梅の風を効ふ。

東江御園邑民。長福小刹を創して師を請す。寛保元年秋。彼の地に到て寒暑を過し。

呵和風吹武野春水滿江州卓拄杖出以三月十八日進山師年五十六師常示徒曰千聖不傳底事不在言句上不涉二途直下大休大歇步步是祖師眼睛着々是出身活路此外更無他日用只無事坐是我平生受用底且當山舊規也是故十一年間不事上堂小參示衆普說等二六時中只要純一辨道打成一片而已於是參玄之輩曳踵輻湊吞氣含聲寒殺熱殺元如枯木而恨不契而憤死者幾多乎既倒之狂瀾大興洞上宗風然而橫接豎接稍倦乎勉思以退院而不肯許可既而元文元年丙辰春太守公直惟有病寒六月起去薦拔事畢付席於西來瑞公自打退鼓唱偈云住山三處已三十年光陰倏忽無變無遷瘴風一陳暮過長天夜々明月印破萬川卓拄杖便出暫退跡御園邑長福翌春移居于參州醫王原是善阿彌剎

和風吹武野 春水滿江州 卓拄杖出

三月十八日を以て進山。師歳五十六。師常に徒に示して曰く。千聖不傳底の事。言句上に在らず。二途に涉らず。直下大休大歇すべし。歩々はれ祖師の眼睛。着々はれ出身の活路。此の外か更に他無し。日用只無事にして坐せよ。是れ我が平生受用底。且つ當山の舊規なり。是の故に十一年の間だ。上堂 小參 示衆 普說等を事とせず。二六時中只だ純一辨道打成一片ならんことを要するのみ。是に於て。參玄の輩ら踵を曳て輻湊し。氣を吞み聲を含み。寒殺熱殺。兀たること枯木の如にして契て憤死せざることを恨る者幾多か。既に倒るの狂瀾を廻して大に洞上の宗風を興す。然して横接豎接稍や勉むるに倦む。

以て院を退んことを思ふも肯て許可せられず。既にして元文元年丙辰の春。太守公直惟病有り。夏六月逝去。薦拔事畢て。席を西來の瑞公に付して自ら退鼓を打し、偈を唱て云く。

三處に住山すること已に三十年

光陰倏忽として變無く遷無し

凜風一陳長天を暮過し

夜々の明月萬川を印破す

拄杖を卓して便ち出づ。暫く跡を御園邑長福に退く。翌春。居を參州医王に移す。原と是れ善阿弥創造の地。



享保元年丙申秋、木泉明導哲公素、欽師手軌、馳使具職、延師以續後席、冬十一月入寺、師年四十六、禿侶麤至、法席增盛、凡關中寺院、苟圖結制、必請師執法柄、授戒垂誡、蒙其益者不可勝計、兵先是寺罹地震、之災諸堂頽毀、師顧其藁起堂舍、亦皆破圯、既極躬親、挖鉢於武相二州、搜材鳩工、方歷五載、大殿告竣、享保九年甲辰、秋丕開戒場、以作落慶供養、黑白婦戒者不皇指屈焉、享保十一年丙午、冬、江州彦根城主井伊直惟公欲請師住清涼、由此現住曉公厚聘、延師、師謂吾從來只爲脚跟下不曾爲他一生山林閑居、慕古人跡、灰頭土面白養、痒癢是吾分所宜也、况不可近王公大臣者、是佛祖聖範也、今我奚以、以建彼耶、屢辭屢請、遂不得已、而領命焉、翌年丁未、春、是大泉趣清涼有偈曰、  
 十餘歲土面白養、神出鬼沒、陸地行舟、阿呵

享保元年丙申の秋。大泉明導哲公素より師の垂範を欽む。使を馳せ疏を具し師を延て以て後席を續しむ。冬十一月入寺。師年四十六。禿侶麤の如に至り法席増々盛なり。凡そ關中寺院苟も結制を圖る必ず師を請して法柄を執しむ。授戒。垂誡其の益を蒙る者勝て計ふべからず。是より先。寺地震の災に罹り。諸堂頽毀。師其の藁起の堂舍も亦皆な破圯既に極ることを顧て。躬ら親く武相の二州を托鉢して。材を搜き工を鳩め。方に五載を歴て大殿竣ることを告ぐ。享保九年甲辰の秋。丕に戒場を開て。以て落慶の供養を作す。黑白歸戒の者指を屈するに違あらず。享保十一年丙午の冬。江州彦根城主井伊直惟公師を請て清涼に住せしめんと欲す。此に由て現住曉公厚く暇して師を延く。師謂らく吾れ從來只だ脚跟下の爲にして曾て他の爲にせず。一生山林に閑居して古人の跡を慕ふ。灰頭土面白ら痒癢を養ふ。是れ吾が分の宜き所なり。況んや王公大臣に近くべからざるは。是れ仏祖の垂範なり。今ま我れ奚ぞ此を以て彼を違んや。屢々辭すれば屢々請す。遂に己むことを得ずして命を領ず。翌年丁未の春。大泉を退て清涼に趣く。偈有り曰く

十餘歲 土面白養 神出鬼沒 陸地行舟 阿呵阿

母寡居久矣。師依佛制時轉衣資以贖朝夕。恰如曹溪於老母三十餘年一日。無慈母亦祝髮。染衣益感孝也。寶永元甲申。夏和尚應請行化。越後師執中區焉。二年乙酉。冬省親。和尚於信列松嶽便許入室。付以從上系譜。并寶鏡三昧。參同契。師拜受。而還鳳林。三年丙戌。夏下野州。西方亮具艷師芳譽。請為一會。表率。四年丁亥。奉勅。瑞世于永平。事畢。直抵備陽。拜和尚於玉為即。辭到備之福城。東普門庵。杜門。打睡。三年。此間不要一物。恰如神龍潛淵。因彈曰。卧龍道人。六年己丑。春。忽和尚の不安なることを聞て出て之を問訊す。滅後喪畢。復た普門に歸る。是の時に當て受業師も亦た化せり。秋。遺書を師に致す。師其の重荷を辞すること能はず。菴を棄て復た玉嶋に走り和尚の遺塔を拜辭して。徑に東武に趨る。縑素請して宗穩に住しむ。冬十一月進院師年三十九。正徳二年壬辰の夏を以て結制開堂。一衆皆な道標に服す。二輪不に轉ず。時に師年四十二。

しかも母寡居久し。師佛制に依て時より衣資を轉じて以て朝夕に賑す。恰も曹溪の老母に於るが如し。三十餘年一日なり。慈母も亦祝髮染衣蓋し老を感じてなり。宝永元甲申の夏。和尚請に應じて越後に行化す。師中區を執る。二年乙酉の冬。和尚を信州松嶽に省親す。便ち入室を許す。付するに従上の系譜ならびに宝鏡三昧。參同契を以てす。師拜受して鳳林に還る。三年丙戌の夏。下野州西方の亮具。師の芳譽を艷で請して一会の表率と為す。四年丁亥。勅を奉て永平に瑞世。事畢て直に備陽に抵り和尚を玉嶋に拜す。即ち辞て備の福城の東。普門庵に到り門を杜て打睡すること三年。此の間一物を要せず。恰も神龍の淵に潜むが如し。因て號して臥龍道人と曰ふ。六年己丑の春。忽ち和尚の不安なることを聞て出て之を問訊す。滅後喪畢て復た普門に歸る。是の時に當て受業師も亦た化せり。秋。遺書を師に致す。師其の重荷を辞すること能はず。菴を棄て復た玉嶋に走り和尚の遺塔を拜辭して。徑に東武に趨る。縑素請して宗穩に住しむ。冬十一月進院師年三十九。正徳二年壬辰の夏を以て結制開堂。一衆皆な道標に服す。二輪不に轉ず。時に師年四十二。

安居秋抵備之玉鷲、元祿十二年己卯夏、和尚備後の法雲  
 在備後法雲開堂結制師往侍之仲夏和尚完  
 戒上堂師出問、靈行者祝髮事、便不問高沙彌  
 不受戒意旨如何、和尚云、動搖揚古路、不墮情  
 然機師曰、瞻之仰之、和尚曰、汝脚跟下、更作麼  
 生師曰、一葉落知天下秋、和尚曰、知即得、師便  
 禮拜自是、潛利冥益造詣頗多、矣是秋觀光雲  
 之堂、致安舌、于松江東光愚光之會、季如肥前  
 依止高傳、行寂二寒暑通聞、和尚將結制於西  
 未徑還備陽和尚觀師至、惟曰、比聞禪定曹源  
 結冬安衆、以修先師七週忌齋、我欲遠勞汝、與  
 十洲致奠於含空塔前、便昇書去、師受命赴之  
 翌春會散、便還備陽時、武之栖鳳林久鑑院人  
 差師赴之、師至于彼、爲衆執勞、艱辛備至、躬  
 盡、除於是、水村宗賢居士等、遙迎和尚、拔誠供  
 養之、皆師至誠之所致也、師天性孝順、父母而

安居。秋。備の玉鷲に抵る。元祿十二年己卯夏。和尚備後の法雲  
 に在て開堂結制。師往て之に侍す。仲夏。和尚完戒上堂。師出て  
 問ふ。靈行者祝髮の事は便ち問はず。高沙彌受戒せざる意旨如何。  
 和尚云く。動搖に古路を揚て悄然の機に墮せず。師曰。之を瞻之  
 を仰ぐ。和尚曰く。汝ち脚跟下の事作麼生。師曰。一葉落て天下  
 の秋を知る。和尚曰く。知らば即ち得ん。師便ち禮拜。是れより  
 潛利冥益。造詣頗る多し。是の秋。雲の靈蹤を觀光し。松江東光  
 愚光の会に安居す。尋で肥前に如き高傳の行寂に依止すること二  
 寒暑。適く和尚將に西來に結制せんとすと聞て。徑に備陽に還る。

和尚師の至を觀て懽んで曰く。比る聞く。禪定曹源。結冬衆を安  
 して以て先師七週忌の齋を修す。我れ遠く汝と十州と勞して奠を  
 含空塔前に致んと欲す。便ち書を昇て去らしむ。師命を受て之に  
 赴く。翌春の会散じて復た備陽に還る。

時に栖鳳林鑑院の人を欠ぐ。師を差て之に赴しむ。師彼に至つて  
 衆の爲に勞を執る。艱辛備に嘗。糞除を射するに至る。是に於て  
 水村宗賢居士等遠く和尚を迎て。誠を投じて之を供養す。皆な師  
 至誠の致す所なり。師天性父母に孝順。

慈止祇陀寺一夜忽憶參禪學道只在于圓光  
 返照就己研窮。驀打破虚空得大安樂。即趨上  
 大來呈其所解。和尚曰。諦當一句試道。將未。師  
 曰。到者裡不能道。和尚曰。未是安樂地。更著精  
 彩。勵聲喝出。時師年二十五。心地雖無所擬。臨  
 事或有滯礙。於是憤激倍甚。是冬玉龍太舜和  
 尚結制大來。擢遣如師輩者十餘員。以助化儀。  
 師往于彼而大勵力。除大小便。未始更其單位。  
 及仲冬四日夜。不學全身放倒。揚聲大呼々々而  
 不止。香五枝許。忽聞開靜之聲。廓爾始覺。渾身  
 汗流。心身清朗如坐虚空。於是從來所知始忘。  
 歡喜不可言也。遂復却回。大來逐一咨扣。和尚  
 和尚痛下鍼劄。師應答如流。徒是罷參。隨緣長  
 養。至春和尚過。退鼓。師亦辭之。尾州參。惟惠於  
 萬松駐錫。一基復還。東關省受業及母尋欲觀。  
 和尚於備陽路經賊州。謁眼口。於大祥一夏。

由て辭して祇陀寺に憩止して一夜忽ち參禪學道は只だ回光返照に  
 在りと云ふを憶て。己に就て研窮す。驀に虚空を打破して大安樂  
 を得。即ち趨て大乘に上り。其の所解を呈す。和尚曰く。諦當の  
 一句試に道將ち來れ。師曰く。者裡に到て道こと能はず。和尚曰  
 く。未だ是れ安樂の地にあらず。更に精彩を著よ。聲を勵して喝  
 出す。時に師二十五。心地疑ふ所無と雖ども事に臨で或は滯礙有  
 り。是に於て憤激倍々甚し。是の冬。玉龍の大舜和尚結制、大乘  
 より師の如き輩者十餘員を擢遣して以て化儀を助く。師彼に往て  
 大に力を勵し。大小便を除て未だ始より其の單位を更ず。

仲冬四日の夜に及て學ず全身放倒。聲を揚て大に叫び叫て止まざ  
 ること香五枝許り。忽ち開靜の聲を聞て廓爾として始て覺ふ。渾  
 身汗せ流れ心身清朗。虚空に坐するが如し。是に於て從來の所知  
 始て忘す。歡喜言ふべからざるなり。遂に復た大乘に却回して逐  
 一和尚に咨扣す。和尚痛く鍼劄を下す。師応答流るゝが如し。是  
 れより罷參。縁に隨て長養。春に至て和尚退鼓を過つ。師も亦辭  
 して尾州に之き。惟惠を萬松に參ず。錫を駐ること一基。復た東  
 関に還り。受業及び母を省し。尋で和尚を備陽に觀せんと欲す。  
 路駿州を経て。眼口を大祥に謁し。一夏

龍穩碓見器重留侍尤石具高外二字以副其諱翌年秋郁應綸命視篆永平師從之一夜郁召師謂曰縱諸一大藏經未了生死則名釋門異端豈可謂佛祖正宗乎汝今歧踈於打坐寶場不宜空手而還請深思之師聞以言如吞鉄丸心頭不安自今以來常就靜處面壁體究既而未幾郁公謝事還于東武師亦隨之或時詣于大山誓曰生々世々修進勇猛不退不轉而至于未來除我若苟生怠慢則願大聖明王利劒刎頸罰之從是自覺身心堅固益右拔山之勢適閱華嚴經則云多聞礪實智以語符合郁公之言因生慚愧深矣由是放下万事隻字片言不要遮眼日夜打坐耳時旧友靖子從加北來盛稱德翁和尚旺化於大乘往往參之朝暮不捨寸陰翁知其勇猛懇加琢磨是春就和上稟受大戒時求掛塔由是解

て之を器重す。留て左右に侍せしむ。且つ高外の二字を號とし以つて其の諱に副う。翌年秋。郁 綸命に應じて永平に視篆す。師従つて之く。一夜。師郁を召して謂つて曰く。縱い一大藏經を諳んずるも未だ生死を了せずんば。則ち釋門の異端とよばわれん。豈に佛祖の正宗と謂うべけんや。汝ち今ま踵を打坐の宝場にのぼりて宜しく空手にして還るべからず。請う深く之を思へ。師此の言を聞て。鉄丸を吞むが如く心頭安からず。爾せしより以來常に静處に就て面壁休究す。既にして未だ幾くならざるに。郁公事を謝て東武に還る。師も亦た隨て之く。或る時。大山に詣て誓て曰く。

生々世々修進勇猛不退不轉にして未來際に至らん。我れ若し苟も怠慢を生ぜば。則ち願はくは大聖明王利劒もて頸を刎ね之を罰せよ。是より自らさととり身心堅固益々山を抜くの勢有り。適々華嚴經を閱るに則ち云く。多聞実智を礪と。此語郁公の言に符合す。因て慚愧を生ること深し。是に由て万事を放下し。隻字片言も眼を遮ることを要せず。日夜打坐するのみ。時に旧友靖孚加北より来て。盛に德翁和尚化を大乘に旺にすと称す。徑に往て之に參じ、朝暮寸陰を捨てず。翁其の勇猛なることを知て懇に琢磨を加ふ。是の春和尚に就て大戒を稟受す。時に掛塔を求る者夥し。是に

回踵早過了山僧今日懶開窓伏客々地  
 皇々切忌劃東劃西大衆久立珍重  
 圓通開山老和尚三十三回忌拈香三十三  
 春已回香爐雪解紫煙閑只當怡逸莫惆悵無  
 限東風吹面來

醫王開山高外老和尚行狀

師諱全國字高外號臥龍武藏州高麗郡中澤  
 邑真野氏子也寬文十一年辛亥五月二十六  
 寅刻誕生矣幼婉之時手奉適口雙瞳睨人不  
 爲兒呱客負出群自襁褓中喜見僧伽稍及十  
 長脫白志切父母知其志不可奪遂授于州之  
 宗穩法瑞說和尚髮落年甫十二日夜不怠學

日集西之妻公塲之訪錄則郁法叔

回すも早くも蹉過し了れり。山僧今日口を開くにものうし。□。喚カ  
 天蒼々地皇々。切に忌む東に劃し西に劃するを。大衆久立珍重。  
 圓通開山老和尚三十三回忌拈香。

三十三年春は已に回る 香爐の雪とけて紫煙ひらく 只まさに怡  
 逸すべし惆悵することなかれ 限りなき東風面を吹き来る

医王開山高外老和尚行狀

師諱は全國字は高外。臥龍と號す。武藏州高麗郡中澤邑真野氏の  
 子なり。寬文十一年辛亥五月二十六寅刻誕生す。分婉の時。手か  
 ら拳して口を遮ふ。雙瞳人を睨て兒呱を爲さず。容貌出群。襁褓  
 の中より僧伽を見ることが喜ぶ。稍長ずるに及んで脱白の志切な  
 り。父母その志の奪うべからざるを知り。遂に州の宗穩法瑞說和  
 尚に投じて髮落す。年甫めて十二。日夜怠らず學業日に進む。十  
 四の夏。說公これを携えて。馥州郁法叔を龍穩に訪う。郁一見し

四山簪<sup>ニ</sup>從々且<sup>ニ</sup>盡<sup>ニ</sup>畢竟是<sup>ニ</sup>什<sup>ニ</sup> 相<sup>ニ</sup>和<sup>ニ</sup>  
 三世諸佛從是作歷代祖師依是成山僧今日  
 情與非情等入者裡安居諸仁者還會麼拂一  
 拂云一陳寒風吹雨後巍々獨露龜尾峯  
 初祖忌廓然無聖太即當隻履西皈醜外揚要  
 識南天胡鬚赤黃花紅葉不曾藏  
 七十祝誕上堂眉毛千尺乾坤醜醜行藏万差  
 山川揚詬黑漆桶郎無面目奴殘齡七旬與衆  
 唱毒且道諸大衆還見老僧麼拂一拂云昨夜  
 紅顏眉加霜今朝白髮鬢生綠  
 臘八寒色侵夢五更曉雪裡幾人眼不開莫謂  
 今朝試遁去梅花元在南枝堆  
 庚申歲元旦且山凝帶霞翠澗泉通暖清梅開微  
 笑粧松響不傳色無端唱起摩訶吉天上人間  
 德澤盛  
 解制上堂眉毛端上看眼為蛇毛無寸草裡

四山空に簪えて巖々。しばらく□<sup>迂カ</sup>。畢竟これ什<sup>磨カ</sup>□<sup>打二円相一カ</sup>云く。  
 三世の諸佛も是れよりなし歴代の祖師も是れによりてなす。山僧  
 今日情と非情とひとしく者裡に入りて安居の諸仁者還って会すや。  
 拂一拂して云く。一陳の寒風雨を吹きて後。巍々として獨露す龜  
 尾峯。  
 初祖忌。廓然無聖はなはだ即當。隻履西歸醜外に揚ぐ。南天の胡  
 鬚赤を識んと要せば。黃花紅葉かつて藏さず。  
 七十祝誕上堂。眉毛千尺乾坤醜をあます。行藏万差山川詬をあぐ。  
 黒漆桶の郎無面目の奴。殘令七旬衆と寿を唱う。  
 しばらく道わん。諸大衆還て老僧を見るや。拂一拂して云く。昨  
 夜の紅顏眉霜を加う。今朝の白髮鬢に緑を生ず。  
 臘八。寒聲夢を侵す五更の曉。雪裡幾人か眼開かず。謂うことな  
 かれ今朝成道し去ると。梅花もと南枝にありてうずたかし。  
 庚申歲元旦。山谿霞を帯びて翠。澗泉暖を通して清し。梅は開く  
 微笑の粧。松は響く不傳の聲。端なくも唱起す摩訶吉。天上人間  
 德澤盛んなり。  
 解制上堂。眉毛端上眼を著けるも蛇□□が為に。無寸草裡に踵を

遺畫圖 賦面 詎 罪未 泥

泰源院殿御影

巍々堂々電飛雷走國清民寧懿王笏長 聳  
雪推松々愈翠風拂月々正彰

元文元丙辰冬十月朔日退清涼上堂住山三  
處已三十年光陰倏忽無變無遷凜風一陳  
過長天夜々明月印破萬川卓拄杖出  
於元文二丁巳春松應山醫王寺入院

山門峭峻山巒潺湲溪水這裡八字打開卓拄  
杖云直出直入相隨來也

佛殿稽首觀世音物々是圓通燒香三拜  
同四年己未冬結制上堂

指法座云厚於地高於天佛不住祖不到  
坐語云當觀第一義若涉二義舌頭落地衆中  
若箇箇漢出來相見

提綱妙唱不于舌澗水穿石澗知見

泰源院殿御影。

巍々堂々電飛び出走る。國清く民寧らかなることは玉笏の長きに  
還る。響。雪松を推して松いよいよ翠に。風月を拂って月正に彰  
る。

元文元丙辰冬十月朔日清涼を退く上堂。住山三處已に三十年。光  
陰倏忽として變もなく遷もなし。凜風一陳長天に驚過す。夜々の  
明月萬川を印破す。拄杖を卓して出づ。  
元文二丁巳の春松應山医王寺入院。

山門。峭峻たる山巒潺湲たる溪水。這裡の八字打開す。拄杖を卓  
して云く。直出直入相隨來なり。

佛殿。稽首す。觀世音物々是れ圓通。燒香三拜。

同四年己未冬結制上堂。

法座を指して云く。地よりも厚く天よりも高し。佛住せず祖到ら  
ず。

垂語に云く。當觀第一義。もし二義に涉らば舌頭地に落つ。衆中  
もし箇の漢あらば出で来て相見せよ。

提綱妙唱は舌によらず。澗水石を穿って澗<sup>緩カ</sup>知見を絶す。



不可崇祀者裡説休煩惱菩提

何地獄天宮月落不離穹銀山鉄壁去無路鉄

壁銀山来絶蹤即今却知路頭麼拂一拂云者

裡入去吐吞却海印一輪月千山曬出白碧紅

秦源院殿廟成

大地削成一頑石金剛寶塔現斯中霞埋壽嶺  
十般色無限松風吹碧空

題贊

蘆葉達磨

脚下蘆葉筍著邊垓西天東土虛空去來

上宮太子

現迹日東普救群蒙寄心佛乘親揚皇風

地藏

薩埵靈威重々如山入三途底救八苦難

白贊

空華夢幻真與不真全超三際

□□□□□□□□□□□□□□□□何の地獄天宮とか論ぜん。

月落て穹を離れず。銀山鉄壁去るに路無く鉄壁銀山来るに蹤を絶す。即今却て路頭を知るや。拂一拂して云く。者裡に入り去れ。

吐。海印一輪の月を吞却して。千山曬し出す白碧の紅。

秦源院殿廟成る。

大地削り成す一頑石。金剛の寶塔斯の中に現ず。霞は埋む壽嶺千般の色。限り無き松風碧空を吹く。

題贊

蘆葉の達磨

脚下の蘆葉は 邊垓に築著せり 西天東土と 虛空に去来す

上宮太子

迹を日東に現じて 普く群蒙を救い 心を佛乘に寄せて 親しく

皇風を揚ぐ

地藏

薩埵の靈威 重々山の如し 三途の底に入りて 八苦の難を救う

白贊

空華夢幻 真と不真 全く三際を超えて □□□□ 噴 畫図を

遺して賊面を顯し 児孫を誑かして罪未だ泯びず

湛山惠明信女下炬

打破漆桶踣跳虚空涅槃生死電光躡菩提  
煩惱龜毛舉駮正與麼時惠明信女即今向什  
麼處轉身去吐危峯影落真如浪惠明洞徹鉄

圖中

轉貫良機居士下炬

百年彈指日往月來生也死也玉轉機回吐  
千林月落五更曉火裏蓮花一朵開

泰源院殿海印指光大居士下炬

三十七年一場夢拂衣踢著大虚空光明藏裏  
藏身去無影樹頭起香風夫以泰源院殿  
前中郎將海印指光大居士德澤海曠嘉聲耳  
聾親耳清涼流滴々知其所止直握金章印騰  
騰仰其有功惟忠惟孝豈一世雄仰之彌高普  
天震漢々鎖之彌堅率土玉玲瓏加之出頭涅槃  
攀城管聖不暴踏穢生

湛山惠明信女下炬。

漆桶を打破して虚空に踣跳す。涅槃生死電光躡をおう。菩提煩惱  
龜毛驪をあぐ。正與麼の時惠明信女即今什麼の處に向つて轉身し  
去る。吐。危峯影落つ真如の浪。惠明洞徹す鉄圍の中。

轉貫良機居士下炬。

百年の彈指日往き月來る。生や死や玉転じて機回る。吐。千林月  
落つ五更の曉。火裏の蓮花一朵開く。

泰源院殿海印指光大居士下炬。

三十七年一場の夢。衣を拂つて踢著す大虚空。光明藏裏身を藏し  
去り。無影樹頭に香風を起す。夫れ泰源院殿前の中郎將海印指光  
大居士德澤海曠嘉聲を以てして親しく清涼の流を辱み滴々そ  
の止まる所を知る。たゞちに金章の印を握り、騰騰として其の功  
あるを仰ぐ。これ忠これ孝あに一世の雄たらんや。これを仰げば  
いよいよ高く普天の雲も漢々たり。これをきればいよいよ堅く率  
土の玉のごと玲瓏。加うるに涅槃城に出頭して諸聖の慕うべから  
ざることを管取し。踏躑<sup>して</sup>□□□□□□□□

諸人一橋下得

解夏上堂召大衆以拂子作彎橋勢云過來  
舉拂子云看出來了也我不妄語擲拂云去々  
日光稍晚珍重下座

八世和尚一周忌倏忽光陰已一回分明無去  
又無來雪圍徑絕壽峯下一陣清風花自開

小佛事

韋駄天開光

天將護法等轉二輪金剛影動百億萬春  
嘆鑒王山裡松長翠福壽海中德播民

長壽院殿覺翁智性大居士十三回忌

智光照破大千界十有三春去倏新吸盡琵琶江  
三万頃分身百億群民

乾光院殿二十七回忌

乾光不昧五夜月圓森羅万像眼界空緣去來  
跡絶十方目前一柱香氣絳煙□□。嘆

解夏上堂。大衆を召す。拂子を以て彎橋の勢を作して云く。過來々。拂子をあげて云く。看よ。出で来り了れり。われ妄語せず。拂を擲つて云く。去れ去れ。日光稍晚し。珍重下座。

八世和尚一周忌。倏忽たる光陰すてに一回。分明に去無くまた来無し。雪圍みち絶つ壽峯の下。一陣の清風花自ら開く。

小佛事

韋駄天開光

天將護法等しく二輪を転ず。金剛影動く百億萬春。嘆。医王山裡松みどりを長じ。福寿海の中に徳を民に播く。

長壽院殿覺翁智性大居士十三回忌。

智光昭破す大千界。十有三春去つてまた新なり。琵琶江三万頃を吸盡して。分身百億群民を育す。

乾光院殿二十七回忌。

乾光不昧五夜の月まどかなり。森羅万像眼界縁を空ず。去来跡たちて十方目前。一柱の香氣絳煙□□。嘆。

接龍象一馬頭堂古曲カ時成只餘カ幾度春秋毛骨清  
 佛生會堪笑瞿曇降誕日指天指地是何顏請  
 看琶水夕陽裡采々孤峯浴波間  
 永平忌カ大白峯前風數燭扶桑國裡夜懸燈眼  
 橫鼻直誰知得五百年來妖怪興  
 初祖忌示衆直指人心虛空窠穴聖諦廓然平  
 地起垵十萬里程路不遙片舟浮海水不做聲  
 叢林餘這鈍癡人千歲到今肉尚秘  
 秀童開山祖曉老和尚計至拈香無面目兮無  
 用字人間天上更難名要看斯不啻留漢脚下  
 放光風骨清  
 臘八六載向空鑒空穴今朝打失旧知人普天  
 率土無尋路鷄唱五更月一輪  
 結夏上堂召大衆打一圓相云一竅埋却了且  
 道誰是跳出底其カ未カ然且カ時カ日カ

はじめて僧堂を開きて龍象に接す。新豊の古曲此の時に成る。只一馬頭カを餘し得て。幾度の春秋か毛骨清し。

佛生會。笑うに堪えたり。瞿曇降誕の日。天を指し地を指して是れ何のかんばせぞ。請う看よ。琶水夕陽のなか。朶々たる孤峯波間にゆあみす。

永平忌。大白峯前風焰をはく。扶桑國裡夜の燈をかく。眼横鼻直誰か知得せん。五百年來妖怪おこる。

初祖忌示衆。直指人心虛空に穴を穿ち。聖諦廓然平地に垵を起す。十萬里程路遙ならず。片舟海に浮びて水とおさず。聲。叢林にこの鈍癡の人を餘して。千歲今に到って肉なおかんばし。

秀童開山祖曉老和尚計至る拈香。

無面目。無用字。人間天上さらに名づけ難し。斯の不啻留の漢を看んと要せば。脚下に光を放って風骨清し。

臘八。六載空に向って空穴をうがち。今朝打失す旧知の人。普天率土たずねるに路無し。鷄は唱う五更の月一輪。

結夏上堂。大衆を召す。一圓相を打して云く。一竅に埋却し了れり。しばらく道わん。誰か是れ跳出底。其れ或はいまだ然らざれば。しばらく解夏上堂カ日カを待て。諸人の為に一橋下し得ん。

者、唳、  
臘八上堂。明星一見。眼睛落。叢清涼。撈掩分付。  
衆中恁麼讚歎。喚爲知恩報恩麼。其或未然。山  
僧爲衆指陳。臘月年々深雪裏。寒梅一朵吐  
香紅。

元旦示衆。三陽交泰。品物咸新。瑞氣霽々和風  
勻々。壽山松翠。龜嶺竹彬。脚下顧跡。觸目全身。  
舉拂云。擲鳥藤拍。手叫。萬歲。七十二峰笑頻々。

解夏上堂。刻期圓滿。各西東。靠壁鳥藤飛化龍。  
万里行程無寸草。肅然脚下起清風。恁麼告報  
山僧念誦。錢別大衆。且道。萬里無寸草。向什麼  
處去。拂。拂。下座。

圓通開山高老和尚二十七回忌拈香。二十七  
回倏忽遷阿爺。風骨溢眉鮮。正當今日。以何供  
舍。盛紅梅穿鼻。荳。

當山五世禪岩和尚十三回忌拈香。

臘八上堂。明星一見。眼睛叢に落つ。清涼撈掩して衆中に分付す。  
恁麼の讚歎あらためて恩を知りて恩に報ずとなさんや。其れ或は  
未だ然らずんば山僧衆のために指陳せん。擲。臘月年々深雪のな  
か。寒梅一朵香をはきて紅。

元旦示衆。三陽交泰して品物みな新なり。瑞氣霽々たり和風勻々  
たり。壽山松はみどり龜嶺竹はあざやか。脚下跡を顧みれば觸目  
全身。拂を擲して云く。擲。鳥藤手を拍って万歳を叫び。七十二  
峰わらい頻々たり。

解夏上堂。刻期圓滿のおの西東。壁による鳥藤とんで龍と化す。  
万里の行程寸草無く。肅然として脚下清風を起す。恁麼の告報山  
僧念誦して大衆に錢別とす。しばらく道わん。萬里無寸草どんな  
處に向ってか去るや。拂一拂して下座。

圓通開山高老和尚二十七回忌拈香。

二十七回倏忽として遷る。阿爺の風骨眉にあふれて鮮なり。まさ  
しく今日何を以てか供ぜん。露をふくみて紅梅鼻を穿ってかんば  
し。

當山五世禪岩和尚十三回忌拈香。

有人去明新清涼何是奇特事向他道元是  
帝都住居西衆慈久立珍重  
元旦示衆新年公案如何現成野梅含笑遊鳥  
弄聲雖然與麼猶未免隨在聲色裡作麼生是  
元旦一句拂一拂云祥壽山頭雪削玉金龜城  
裡雨吹晴

佛涅槃示衆瞿曇老瞿曇老四十九年也太奇  
今日轉身那裡去山河大地避無處

佛生會示衆帶風柳條輕浴露山花馨還我雲  
老棒得令人貴守清平

結夏上堂春分過去夏分來公案現成奚有猜  
這中誰不狐疑不領底麼風益清涼湖水穩雲  
籠祥瑞壽峯堆吐猶餘瞋睡卓拄杖下座  
永平忌天童山裏脫皮骨觸處儼然乃祖身看  
看江上一輪月影浮寒水蘆花新

初祖忌西來直指多々啞々雙履空棺何者をか欺誑す。咦。

人あり若し新清涼いかなるかはれ奇特事と問えば。他に向いて道  
わん。元是れ帝都住居の西と。衆慈久立珍重。

元旦示衆。新年の公案如何んが現成す。野梅笑を含みて遊鳥聲を  
弄ず。然も與麼なりと雖も猶も猶も聲色裡に墮在することをいまだ免  
れず。作麼生かはれ元旦の一句。拂一拂して云く。祥壽山頭雪玉  
を削り。金龜城裡雨晴を吹く。

佛涅槃示衆。瞿曇老瞿曇老。四十九年也太奇。今日轉身那裡にか  
去る。山河大地避るに處無し。

佛生會示衆。風を帶て柳條軽く。露に浴して山花馨し。我に雲老  
の棒を還し得ば。人をして貴らくは清平を守らしめん。

結夏上堂。春分過ぎ去り夏分来る。公案現成奚ぞ猜有らんや。這  
の中誰か狐疑不領底ありや。風清涼に益して湖水穩。雲祥瑞を籠  
めて寿峰たかし。咄。なお瞋睡を餘す。拄杖を卓して下座。

永平忌。天童山裏皮骨を脱し。觸處儼然たり乃祖の身。みよみよ  
江上一輪の月。影は寒水に浮びて蘆花あらたなり。

初祖忌。西來直指多々啞々。雙履空棺何者をか欺誑す。咦。

空語機前薦得早。案曰句後承當。模壁扶  
 踏。兩頭通消息。看問各不錄。敝衣就座。通云  
 祥雨灑壽峰。瑞雲繖。灰城現成蜜。妙露堂々  
 湖水。顰碧夷鶴。鵲和月夜。賣珊瑚。比山生黑時  
 金龍。合寶。明忘機巧。正與麼時。大地群生。俱表  
 珍御。森羅万象。齊擔授記。純助大功之化。堪報  
 不報之恩。其或未然。舉拂云。白牛畔。盡寒巖雪  
 靈鳥不啗天地春。

如國上座。叢林榜櫟繩。墨何堪強。遭勾引。業風  
 西南。

恭惟洞壽堂頭和尚。五臺老古錫。濁世鳳凰兒。  
 持千佛。通身成鼓吹。如是證明何敢。堪報  
 恭惟光臨。專宿山門。兩序合山大衆。四來雲納  
 厚存護國。深重大衆。各退其位。事辱肢肱。不任  
 下情。慙愧之至。

舉僧問。天如何。奇特更。曰。獨坐大雄峯。

垂語。機前に薦得するも早くも窠臼に落つ句後承當するも模壁扶  
 籬。兩頭を踏躋して。消息を通ぜよ。看ん。問答不録。衣を敝め  
 て座につきすなわち云く。祥雨壽峰にそぎ瑞雲彦城にたなびく。  
 現成蜜々にして妙露堂々たり。湖水碧をかもすところ鶴鵲月にあ  
 わせて夜珊瑚を賣り。比山黒を生ずる時金龍室を含んで機巧を忘  
 る。正與麼の時。大地の生きとし生けるものすべてが珍御をよそ  
 おい。森羅万象ひとしく授記をにない。もっぱら大功の化を助く  
 るならば不報之恩に報ずるに堪えるであらう。それ或は未だし  
 たらざれば拂を舉して云わん。白牛畔盡す寒巖の雪。靈鳥なかず天  
 地の春。

國上座が如き叢林の榜櫟繩墨何ぞ堪えん。強いて勾引に遭いて業  
 風西南。

恭しく惟れば。洞壽堂頭和尚は五臺の老古錫。濁世の鳳凰兒。千  
 佛の號令を持ちて通身鼓吹を成す。かくの如き證明何ぞ敢て報ず  
 るに堪えん。恭しく惟れば。光臨の尊宿山門の兩序合山の衆四  
 來の雲納。厚く護國を存し大乘を深く重んじ。各其の位を退き専  
 ら股肱をかたじけなしとせり。下情慙愧の至りにたえず。

舉す。僧百丈に問う。如何なるか是れ奇特の事。丈曰く。獨坐大  
 雄峯。

為且煩都寺敷宣一上。  
 拈衣皮肉骨髓云是傳衣受用底是誰。  
 這香爐向寶爐端為祝延。  
 今上皇帝聖壽億萬年陛下仰願德令乾坤接  
 太平治化圓玉燭沾清明。  
 這香爐向爐中為征夷大將軍源大相國公上  
 陪釣竿伏願補袞調羹功全處佛日長輝堯日  
 天。  
 這香爐向爐中為大檀越井伊賢君資陪祿竿  
 伏願德籠武網傳子孫齡護法門及累代。  
 這香爐向爐中為滿朝賢佐外護檀信及十方  
 有緣諸檀父母六親等普供養願慧水永潤福  
 田德業長榮壽域。  
 這香西來沒量臟腹郁難埋藏今日不免熱向  
 爐爐屈辱前住惣持圓通開山德翁高老和尚  
 暗地慚慚。

且つ都寺を煩して敷宣一上せん。

拈衣。皮肉骨髓是を傳衣という。受用底は是れ誰ぞ被をとぐこの香宝爐に熱向して端に為に

今上皇帝聖壽億萬年を祝延し上る。陛下仰ぎ願くは徳乾坤に合て大平の治を播き化は玉燭を圓にし清明の恩に沾んことを。

この香爐中に熱向して征夷大將軍源の大相國公の為にす。上み釣竿を陪け伏して補袞調羹の功全き處佛日長く輝く堯日の天。

この香爐中に熱向して大檀越井伊賢君の為にす。祿竿を資陪し伏して願わくは徳武網に籠めて子孫に傳え齡法門を護して累代に及ぶを。

この香爐中に熱向して滿朝の賢佐外護檀信及十方有緣の諸檀父母六親等の為に普く供養す。願わくは慧水永く福田を潤し徳長く壽域に榮えんことを。

この香西來の沒量臟腹郁として埋藏し難し。今日免れず爐中に熱向して前住惣持圓通開山徳翁高老和尚に屈辱し暗地に慚顔せしむ。



一脈大泉流不竭。樞公面目在機前。補陀巖畔花色  
 花遜色。昨夜春回五百年。  
 退大泉。示衆一十餘歲。土面灰頭。神出鬼沒。  
 陸地行舟。阿呵々和風吹。武野春水滿。江州卓  
 拄杖便出。  
 師於享保十二丁未春三月十八日江州祥壽  
 山清涼禪寺進山開堂。  
 山門南北東西一條活路。且道門限在那裡。卓  
 拄杖一下去。好兄弟莫仆躓便入。  
 佛殿拈華。老賊熱瞞鈍置。咦。琵琶江水深。壽  
 峰翠率。  
 據室全提正令。禮樂殷々。豎拂云。石女產子鉄  
 樹花芬。  
 山門疏。高山流水一任知音。大衆還聽麼。若未  
 然。拈什維那鼓琴。  
 諸山疏。風雷驚龍。鳳翥句中。峰必竟是何所。

一脈の大泉の流れかれず。樞公の面目機前に在り。補陀巖畔花色  
 を添ゆ。昨夜春めぐる五百年。

大泉を退く示衆。一十餘歳。土面灰頭。神出鬼没。陸地に舟をや  
 る。阿呵々。和風武野に吹き。春水江州に満つ。拄杖を卓して便  
 ち出づ。

師享保十二丁未春三月十八日江州祥壽山清涼禪寺に於て進山開堂。  
 山門。南北東西一條の活路。しばらく道はん。門限は那裡にあり  
 や。拄杖を卓すること一下して云く。好兄弟よ仆躓することなか  
 れ。便ち入る。

佛殿。拈華の老賊。熱瞞鈍置。咦。琵琶の水は深く壽峰のみどり  
 ははなやか。

據室。全提正令。禮樂殷々。拂をたてて云く。石女が子を産み。  
 鉄樹の花はかんばしいことよ。

山門疏。高山や流水は知音に一任す。大衆還て聴くや。若し未だ  
 しからざれば維那に令付して鼓琴せしめん。

諸山疏。風雷龍を驚かす處鳳翥句中の峰。必竟是れ何の所為ぞ。

問今日定戒諸佛子促歸路如何是和尚錢別  
一句師云大地雪漫々進云上來且置記得南  
泉歸宗麻谷同訪南陽忠國師次泉於路上打  
一圓相便歸去意旨如何師云非汝所知進云  
爲甚不知得師云待青天落地時僧礼退僧問  
瞻仰人天老大尊無邊德澤八州饒堂中戒子  
三千指傾倒錦腸盡沾恩這箇且置從上佛祖  
有不相侵一處麼也否師云只這虛空不掛鍼

進云此外無別有麼師云礼拜了退進云恁麼  
則学人機々投合便礼拜

師迺去富嶽雪白毘尼嚴規明々陀峯梅香菩  
薩心地歷々到這裡丹霞掩耳去滿肚葛藤高  
禪不登壇通身泥水正與麼時如金剛寶戒諸  
佛子作麼生護持去拂一拂云掬水月在手弄  
花香滿衣衆慈久立珍重

大泉寺殿天桂相公居士五百年忌香語

僧問う。今日完戒諸佛子歸路を促す。如何なるかはれ和尚錢別の  
一句。師云く。大地雪漫々。進んで云く。上來はしばらく置く。  
記得す。南泉・歸宗・麻谷同じく南陽の忠國師を訪うついで泉路  
上において一圓相を打して便ち歸り去る。意旨如何ん。師云く。  
汝が知る所に非ず。進んで云く。なんとなしてか知り得ざる。師  
云く。青天落地の時を待て。僧礼して退く。僧問う。人天の老大  
尊を瞻仰すれば無邊の德澤八州に饒る。堂中の戒子三千指錦腸を  
傾倒して盡く恩に沾う。這箇は且く置く。從上の佛祖相侵さざる  
一處有りやまた否や。師云く。只だ這の虚空に鍼を掛けず。進ん  
で云く。此の外か別に有ること無しや。師云く。礼拜し了って退

け。進んで云く。恁麼なるごとくんば学人機々投合。便ち礼拜。  
師迺ち云く。富嶽雪白くして毘尼の嚴規明々たり。陀峯の梅香し  
て菩薩の心地歷々たり。這裡に到りて丹霞耳を掩い去るも滿肚の  
葛藤。高禪壇に登らざるも通身泥水。正與麼の時金剛寶戒の諸佛  
子作麼生か護持し去らん。拂一拂して云く。水を掬すれば月手に在  
り。花を弄すれば香衣に満つ。衆慈久立珍重。

大泉寺殿天桂相公居士五百年忌香語

佛生會

堪嘆瞿曇老古錘周行七步勞精魂風波從此揚平地過殃千古及兒孫

彌陀佛開光

一百萬遍今已滿當來佛果必然圓淨邦此去更休覓劍樹刀山火裡蓮正恁麼時慈眼開明一句作麼生道蘆花雪月一双眼赴感隨機億万年

丙午元旦

十點大泉脈祝皇圖万年前山梅萼發後苑翠光鮮

享保九甲辰秋爲大殿落慶開戒場  
完戒上堂僧問如何是一戒光明師云珊瑚枝  
枝撐著月進云天地未開時又作麼生師云照  
顧脚下進云謝師答話便禮拜僧問學人平日  
如何行履師云遇茶喫茶遇飯喫飯僧禮拜僧

佛生會

わらうに堪えたり瞿曇の老古錘。周行七步精魂を勞す。風波これより平地に揚り。過殃千古兒孫に及ぶ。

彌陀佛開光

一百萬遍今すでに滿ち。當來の佛果必然まどかなり。淨邦此に去つて更に覓ることを休よ。劍樹刀山火裡の蓮。正恁麼の時。慈眼開明の一句。作麼生かいわん。  
蘆花雪月一双の眼。感に赴き機に隨う億万年。

丙午元旦

十たび大泉の脈を點じ皇圖万年を祝す。前山梅萼ひらき後苑翠光あざやかなり。

享保九甲辰秋大殿落慶をなし戒場を開く。

完戒上堂。僧問う。如何なるか是れ一戒の光明とは。師云く。珊瑚の枝枝月を撐著す。進んで云く。天地未開の時また作麼生。師云く。脚下を照顧せよ。進んで云く。師の答話を謝す。便ち禮拜す。僧問う。学人平日如何んが行履せん。師云く。茶に遇ては茶を喫し飯に遇ては飯を喫す。僧禮拜す。

吹牖過、幽間和夢到心頭

重陽

重陽佳節大家新、裡許風光絕世塵、  
籬菊吐香、彭澤畔現成公案自知親

途中偶吟

一百城中空去來、或吟林下或江隈、  
杖藜卓索、歸家路但見梅花處々開

師享保元丙午冬武之大泉禪寺入寺

山門潭底卧龍點額鈍置便入、雨降雲隨

佛殿前釋迦後彌勒、中間底擊燒香禮拜

伽藍無面目、通身荆棘作麼生、是護法威嚴  
一句喝一喝

祖堂業識風顛漢、東西打去來、髓皮沒分付平、  
地起骨堆吐

據室托開、劍樹林占得維摩室、新長老到者裏、  
如何受用云、置拂云、大衆喫茶去

重陽

重陽の佳節大家新なり、裡許の風光世塵を絶たず、  
籬菊香を吐く、彭澤の畔、現成公案自知親し

途中偶吟

一百城中空しく去來す、或は林下に吟じ或は江隈、  
杖藜卓索たり、歸家の路、但だ見る梅花の處々に開くことを

師享保元丙午冬武の大泉禪寺入寺。

山門。潭底の臥龍點額鈍置。左右を顧視して云く雨降り雲随う。便ち入る。

佛殿。前釋迦。後彌勒。中間底。響。燒香禮拜。

伽藍。無面目漢。通身荆棘。作麼生。是護法威嚴の一句。喝一喝。  
祖堂。業識の風顛漢。東西に去來を打し。髓皮沒に分付し平地に  
骨堆を起す。咄。

據室。劍樹林を托開して維摩の室を占得。新長老者裏に到り如何  
が受用し去らん。拂を置きて云く。大衆喫茶去。

諸佛出身處門云東山水上行抽云雲間可超  
把鉤要津不漏水泄有人若致山僧這問向道  
人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開衆意久之  
解夏上堂僧問茶裡飯裡外別有道理也否師  
云無進云爲甚無師云餬餅覓汁漢僧使喝師  
云也是亂喝僧禮拜師迴云打闍佛祖布袋頭  
十方虚空絶羅籠來日空手把鋤頭去時步行  
騎水牛雖然與麼猶是靈龜曳尾畢竟如何卓

拄杖便下座

管相廟 武の中澤村邑に在り

苔封石階到人稀獨立廟前淚滯衣不識降臨  
是何代神光千古照禪扉

自在山偶詠 一首

一鉢隨緣山寺邊 晝耕巖下夜安禪 心頭若記  
幽南事易使善財奔水煙  
階前梅蕊榮香浮山後雪消澗水流半夜春風

如何なるか是れ諸佛出身の處。門云く。東山水上行と。拈じて云く。雲門謂つべし要津を把断して水泄を漏らさずと。人有り若し山僧にこの問を致さば向いて道わん。人間四月芳菲尽きて山寺の桃花始めて盛開と。衆慈久立。

解夏上堂。僧問。茶裡飯裡のほか別に道理ありや也た否や。師云く。無し。進んで云く。なんとしか無きや。師云く。餬餅汁を覓む漢僧便ち喝す。師云く。也た是れ乱喝。僧禮拜す。師迺ち云く。佛祖の布袋頭を打開して十方虚空に羅籠を絶し来る日。空手にて鋤頭を把り去る時。歩行して水牛に騎る。しかも與麼なりと雖も猶ほ是れ靈龜曳尾を曳く。畢竟如何ん。拄杖を卓して便ち下座す。

管相廟 武の中澤村邑に在り

苔は石階を封じて到る人稀なり 獨り廟前に立て涙衣を湿らす  
識らず降臨是れ何れの代ぞ 神光千古禪扉を照らす

自在山偶詠 二首

一鉢縁に随う山寺の邊り 晝は巖下に耕し夜は安禪 心頭若し圖  
南の事を記せば いづくんぞ善財をして水煙に奔らしめんや  
階前の梅ひらきて榮香浮び 山後の雪消えて澗水流る 半夜春風  
牖を吹きてよぎり 幽間夢に和して心頭に到る

酬法乳之恩。飲衣。就座。盡。云。草闕鬼心路不絶。附木。精靈走過。兩頭。格外。一句試舉。來看。有麼。有麼。僧問。窮諸玄辯。若致一毫於大虛。過世。極機。似投一滴於巨海。意旨如何。師云。破草鞋。破木杓。進云。恁麼。則三世諸佛。惣在脚下。師云。汝脚跟下。更作麼生。進云。步步踏著。綠水青山。師云。好箇消息。僧使禮拜。僧問。大事未明。請師開示。一句。師云。石頭大底。大小底。小進云。祖師西來意。又作麼生。師云。近前來。僧近前。師云。踉蹌也。不知。僧禮拜。師迴。豎拂云。臥龍奮迅。露頭額於八州。中怒雷忽。曳林。甘雨。於四海外。自在山頂。枯木開花。中澤村下。瓦礫。放光可謂。威音風光。觸目現成。直得。木人合掌。奏三臺曲。石女低頭。歌南風詩。正與麼時。畢竟功歸何處。拂一拂云。六國清平賀。聖壽。珠簾。高拱。月明前。謝詞不錄。記得。僧問。雲門如何。是

衣を歛して座に就て垂語して云く。祖闕透らずんば依草の閑鬼。心路絶たずんば附木の精靈。兩頭を走過し。格外の一句試に挙し來れ。看ん有りやありや。僧問う。諸の玄辯を窮むるも一毫を大虚に致すがごとし。世の樞機を竭すも一滴を巨海に投ずるに似たりと。意旨如何。師云く。破草鞋破木杓。進んで云く。恁麼ならば則ち三世の諸仏も惣に脚下に在り。師云く。汝の脚跟下の事をもさん。進んで云く。歩々踏著す綠水青山。師云く。好箇の消息。僧便ち禮拜す。僧問う。大事未だ明らめず。請う師一句を開示し玉へ。師云く。石頭の大底は大。

小底は小。進んで云く。祖師西來の意またそもさん。師云く。近前來。僧近前す。師云く。蹉過するもまた知らず。僧禮拜す。師迺ち拂を豎て云く。臥龍奮迅して頭額を八州に露し。怒雷忽ち甘雨を四海の外に淋ぐ。自在山頂枯木花を開き中澤村下瓦礫光を放つ。謂つべし威音の風光觸目現成。直に得り。木人合掌三臺の曲を奏し。石女低頭して南風の詩を歌ふ。正與麼の時畢竟功何の處に歸す。拂一拂して云く六國清平。聖壽を賀し珠簾高く捲く月明の前。謝詞録せず。記得す。僧雲門に問ふ。

高外和尚遺語

侍者一行等編

師於正徳二壬辰、武之宗穩寺、結制開堂。  
拈法座云、平沈大地、踏破虚空、須彌百億八達  
七通、便陞座拈香祝。聖罷新拈懷中香云、這  
一瓣香、東請南詢大絕方所、備山武水細入無  
間、無端拈出、熱向寶爐、供養洞山正宗三十六  
世前住大來圓通、洞山先師德翁高老和尚。



高外和尚遺語

侍者一行等編

師正徳二壬辰の夏。武の宗穩寺に於て結制開堂。  
法座を拈じて云く。大地を平沈し虚空を踏破す。須彌百億八達七  
通。便ち陞座拈香。祝。聖罷る。新に懷中の香を拈じて云く。這  
の一瓣香。東請南詢大に方所を絶し。備山武水細に無間に入る。  
端無く拈出して宝爐に熱向し。洞山正宗三十六世前住大乘圓通開  
山先師德翁高老和尚を供養し。用て法乳の恩に酬い上る。

高外和尚遺語

黒田紀也

岡山理科大学  
教養部

（昭和五十九年九月二十七日 受理）